

補遺

訳者による編集——テキスト構築および手稿上の 種々の書き込みの再現をめぐる

富塚祐

本稿の目的は、既訳と比較した際の本書の試みを持つ特徴を、訳者による編集のありように着目して確認することにある。「まえがき」に書かれている通り、本書においては、訳者自身が詩テキストの構築を独自に行い、かつ、加筆修正の痕跡や詩テキスト本体には組み込まれない語句など、手稿上のさまざまな書き込みを、取捨選択しながらも積極的に提示することが試みられている（提示方法に関してはレイタニ版（2001年）のものを参考にしている。レイタニ版については矢羽々（2024）および富塚（2025）を参照）。これらの点が既訳に照らし合わせた時の特徴であるということは、おのおのの担当者によって具体的に説明がなされている。もっとも、その記述は既訳のみならずドイツ語諸版との比較や、判断の背景となった手稿の説明も含む詳細なものであるために、既訳との比較という点に限って把握するには若干わかりにくいのではないと思われる。また、既訳が手元にある場合でも、既訳では翻訳の基底をなすドイツ語テキストが明示されておらず、訳文もそれぞれで異なっているため、実際の比較は手続き上、手間を要する作業になると推測する。こうした事情から本稿は、詩テキストの構築と加筆修正の痕跡や詩テキスト本体には組み込まれない語句の再現に焦点を当てて、本書の試みと既訳において提示されたテキストの違いをまとめていく。実際に本書中の試みと既訳を照らし合わせて比較する際や、その違いをイメージしようとする際、本稿が一助となれば幸いである。

なお、ここで扱う「既訳」は、「まえがき」の冒頭で挙げられており、それぞれの詩に付された編集注記でもたびたび言及されている下記の3つを指す。いずれの場合も、示されているのは基本的に〈きれいな〉テキストであり、各底本で示されている手稿上の種々の書き込み（あるいは注釈）はほぼ扱われていない。こうした事情から、後述する具体例のように、本書中の試みにおいて再現された手稿上の書き込みの中には、既訳では読むことのできない語句が少なからず存在している。この点が既訳に対する大きな特徴のひとつをなしているのは、冒頭で述べた通りである。

(1) 河出書房新社刊『ヘルダーリン全集』（手塚富雄責任編集、1966-69年、全4巻；新装版2007年。以下「河出版」と呼ぶ）：

本書で提示されている詩が収められているのは第2巻であり、底本は全8巻からなるバイスナー版（1943-1985年）の第2巻といえる。このバイスナー版第2巻はテキスト篇（Text）と異同篇（Lesarten）の2冊1組からなっている。そのうち河出版が、実質的な翻訳の対象としているのはテキスト篇である（異同篇に掲載されている、手稿上にみられる加筆修正の痕跡が部分的に詩テキスト本体に組み込まれている例外的な場合もあるが、本書で扱われている詩はそうした例ではない。このことについては書評（谷 1969）も参照）。

なおバイスナー版の詳細に関しては大田の論考(2024)を参照されたい。

(2) 岩波文庫の『ヘルダーリン詩集』(川村二郎訳、2002年。以下「岩波版」と呼ぶ)：

シュミット版(全3巻、1992-1994年)の第1巻を底本としつつ、複数の版を参照したうえで、39の詩が選択、提示されている。底本のシュミット版は、基本的にバイスナー版を踏襲した詩テキストを提示しているという事情から、他の諸版に基づいている詩を除いて、翻訳の基底をなす詩テキストそのものに関しては岩波版と河出版の間にそれほど大きな違いはない。なおシュミット版、あるいは河出版やバイスナー版では複数の稿が示されている詩(たとえば「唯一者(Der Einzige)」「ムネモシュネ(Mnemosyne)」など。これらの詩についての詳細は下記を参照)のうち、岩波版で提示されているのはひとつに限られている。

(3) 高木昌史著『ヘルダーリンと現代』(青土社、2014年)所収の「ヘルダーリン詩集」(263-332頁。以下「青土社版」と呼ぶ)：

全3巻のクナウプ版(1992-1993年)を底本とし、さらにはバイスナー版やシュミット版なども参照して(青土社版264頁参照)、計13の詩が提示されている(目次上では最後期の「夏(Der Sommer)」「秋(Der Herbst)」「冬(Der Winter)」「春(Der Frühling)」がひとまとめにされているため10になっている)。こちらの場合も河出版などで複数稿が示されている詩については、ひとつの稿のみを示している。シュミット版およびクナウプ版については矢羽々の論考(2024)を参照されたい。

以下では「あたかも農夫が祝いの日に…(Wie wenn der Landmann am Feiertage …)」[「あたかも祝いの日に…(Wie wenn am Feiertage …)」(担当：林英哉)から順番に、訳者による編集の様相を確認していく。これらふたつは、同一の主題をめぐる散文稿と韻文稿とみなされており、これまでの翻訳において前者の全体が扱われることはなかった。本稿が扱う既訳の中では、青土社版が韻文稿に付した注釈において、最後の3行を提示するにとどまっている。対して林は、韻文稿、とりわけその断片化した結末部の理解をめぐっては、散文稿も併せて考えることが重要であるという立場から、こちらについても全体を扱うという判断を下している(本書39頁参照)。こうした事情から、「あたかも農夫が祝いの日に…」に関しては、この詩テキスト全体が提示されたこと自体が大きな特徴となる。「あたかも祝いの日に…」の方は、3つの既訳いずれもが扱っている(河出版が「あたかも祝いの日の明けゆくとき……」、岩波版が「祭りの日の……」、青土社版が「あたかも祝いの日に…」と訳している)。ただし、前述の断片化した結末部は、岩波版においてはカットされている。これは訳者が、この詩に関してはシュミット版ではなく、初出であるシュテファン・ゲオルゲ(Stefan George)編集の詩集『ドイツの詩(Deutsche Dichtung)』第3巻(1910年)の編集方針に従っているためである(岩波版226頁参照。なおドイツ語諸版の中ではヘリングラート版も同様の処理を行なっている)。河出版においては、底本のバイスナー版が結末部も詩テキスト本体に組み込んでいるという事情から当該詩行が提示されているが、詩テキスト本体としてではなく、付記という形での補足的な提示となっている。これに対し林は結末部も詩テキスト本体に組み込んで提示している。これらの点に加えて、既訳では扱われていない、詩テキスト本体には組み込

まれないとされる手稿上の語句が本書中では囲いを用いて提示されていることにも触れておきたい。「あたかも祝いの日に…」が示されている版面の中にあるそれらの語句は、林によれば「人間が神の領域へと近づこうとする傲慢さ」を示している（本書37頁）。この、いわゆるヒュブリスに関連する語句は、詩テキスト本体にも表れている（たとえば54行目「天上なる火（himmlisches Feuer）」；本書48頁の当該詩行への注釈を参照）。すなわち、詩テキストには含まれない語句も提示することで、詩中で表現されているテーマをより明確に示すことが試みられているといえる。また、具体的な語句以外にも、手稿上にみられる点が2箇所にとわって再現されているのも本邦においては初めての試みである。林によれば、これらの点は「何らかの意味があって付けられている可能性を否定できない」（本書35頁）、具体的には「一種の区切り記号や、何を書こうか逡巡した形跡などの可能性が考えられる」（本書43頁）という。

「唯一者」（担当：益敏郎）に関しては、「つねに作品が発展段階のさなかにあり、変容可能性を秘めていることそのもの」（本書66頁）を提示することが本書では試みられている。網掛け、複数のフォント、囲いは、この変容可能性を示すために用いられている。この詩の後半の詩句をめぐっては、複数の可能性が詩人によって試みられており、それらの語句は別々の手稿中にみられる。こうした事情から、益はまず、「ホンブルク二つ折りノート（Homburger Folioheft）」と呼ばれる手稿束中の書き込みに基づき全105行を提示したうえで、後半部に網掛けを施している。この後半部にあたる別の詩句とされる、上記「ノート」とは別の手稿上の書き込みを、益は別のフォントを用いて示している。これらに加えて、当該詩行に関しては、さらに別の手稿に書かれた、もうひとつの置き換え可能性が存在している。この部分は紙幅の関係上、本書では完全な形で示されていないが、その様相は「ホンブルク二つ折りノート」上にすでに予示されているという事情から、それらの書き込みが囲いを用いて示されている。これら3つの詩句自体は、河出版においても多くを読むことができるが、その提示方法は益が試みたものとは異なっている。河出版においては、底本のバイスナー版に従い、3つの稿に分けて「唯一者」が提示されている（タイトルの訳は本書と同じ「唯一者」）。益が網掛けで示した部分が第1稿後半部に、別のフォントで示した部分が第2稿後半部に対応する。第3稿後半部は、本書において予示されつつも、明示はされなかったものである。なお、前半部も各稿で若干異なった詩テキストが提示されている。岩波版において提示されているのは、バイスナー版および河出版がいうところの第1稿といえる（タイトルは「一者」と訳されている）。なお青土社版ではこの詩は扱われていない。対して益は、第1稿の後半部として提示されてきた部分（本書での網掛け部分）と、第2稿の後半部とされてきた部分（別フォントで示された箇所）を直接ドッキングし、さらには第3稿の後半部とみなされていた部分を予示する書き込みを、第1稿とみなされてきた書き込みと同一の版面上に示すことで、「複雑かつダイナミックな創作過程を持つプロジェクト」としての「唯一者」を提示しようとしている（本書66-69頁）。

「ゲルマーニエン（Germanien）」（担当：小野寺賢一）の、本書における編集上の土台となった「新稿」が書かれた手稿上には、「旧稿」から転記されたのち、書き換えられた箇所がいくつか存在している。既訳においては、「旧稿」に由来する語句と「新稿」

で書き換えられた語句のいずれも、多くを確認することができる。ただし、それらは元の語句と書き改められた語句のうちいずれかを選択する、という形での提示を行ってきた。河出版と岩波版は「旧稿」を基本としたテキストを示しており、他方で青土社版は「新稿」の語句を多く（ただし全てではない）採用したテキストを提示している（本書92-93頁も参照。なおいずれの既訳もタイトルを「ゲルマニア」と訳している）。対して小野寺は、両方の語句を全箇所にとりて再現することで、これまでの翻訳では示されてこなかった語句を提示することに加え、各箇所が書き換えられたという点を明示している。その提示に際しては、書き換えにかかわったであろうとされる、手稿中の語句の下に引かれた線も再現されている。こうして再現された書き換えの中には、後期ヘルダーリンの詩作上の特徴である箴言調の響きを与えるほか、具体的な形象化を目指すものがあり、そこからは詩人が後期へと向かっていくうでの詩作の様相を見て取ることができる（本書93、98頁）。加えて、手稿上、„von Göttern“（神々を話題にする際）と書かれたのか、あるいは„vor Göttern“（神々の前で）と書かれたのか判読が難しい箇所について、これまでのドイツ語諸版そして日本語訳では採用されてこなかった読みである„vor“が採用されている。これによって、人間と神々の関係がより明確に立ち現れるとする（本書93-94頁）。

「ムネモシュネ」（担当：大田浩司）は、これまでの日本語訳においては、全3詩節構成の詩として示されてきた。これは既訳が参照してきたドイツ語諸版の編集者の多くが、手稿上には、3詩節構成の詩が複数稿にわたって書かれていると判断し、そのように詩を提示してきたことに由来する。河出版はバイスナー版に従い、計3つの稿を示している。岩波版において示されているのは、このうち第3稿にあたる（青土社版ではこの詩は提示されていない）。対して大田は、各詩節の内容上の関連と韻律に着目した既存の試みを援用しながら、全4詩節構成のひとつの詩として「ムネモシュネ」を提示している。この「ムネモシュネ」は「絶えず加筆・修正され続けた」（本書114頁）詩であるという事情から、本書においてもその書き込みの様相がいくつか再現されている。その中にはタイトルが含まれる。タイトルと判断される語句である「ムネモシュネ (Mnemosyne.)」と「ニンフ (Die Nymphe.)」のうち、ドイツ語の多くの諸版が「ムネモシュネ」をタイトルとして示しており、既訳もそれに基づいている（河出版は「ムネーモシュネー」、岩波版は「記憶の女神」と訳している）。しかし本書では「ニンフ」に網掛けを施しつつ、両方の語句を提示することで、詩人が最終的に「ムネモシュネ」をタイトルとして選び取りつつも、「ニンフ」の語を抹消せずに残しているということ、そしてそこから読み取れる内容上の問題を示すことが試みられている（本書113-114頁）。タイトル以外にも、たとえば「しかしなすべきは […] 歌うこと (aber es haben / zu singen)」という、第2詩節の冒頭部における前段階の語句が、本書では網掛けを用いて示されている。注釈によれば、そこからはヘルダーリンが詩作そのものに際してアレゴリーを重要視していたことが窺えるという（本書119頁）。加えて、61行目から67行目にあたる前段階の書き込みとして網掛けで示されている部分は、62行目で„Dier“という（この„Dier“自体は詩テキスト本体に含まれる語句である）、女性名詞に用いられる定冠詞dieと、男性名詞に用いられる定冠詞derが融合したようにみえる語が書かれたことをめぐる解釈と関連

づけられており、詩テキスト本体の解釈可能性を示す機能を有している（本書130頁）。もっとも、ここで取り上げた、第2詩節冒頭および61行目から67行目の前段階の書き込みは、既訳において全く読めないというわけではない。というのは河出版においては、これらの語句のほとんどは第1稿の一部をなしているためである。河出版と本書における各詩節の対応関係は以下の通りである。河出版の第1稿は、本書における「記号」の詩節中の語句と当該詩節の前段階の語句からなる詩節、「問い」の詩節、「アキレウス」の詩節にそれぞれ近い。第2稿は「記号」の詩節、「問い」の詩節、「アキレウス」の詩節に近く（河出版では第2節以降は「以下は第1稿と全く同じ」として省略されている；河出版第2巻241頁）、第3稿は「果実」の詩節、「問い」の詩節、「アキレウス」の詩節にそれぞれ近い。ただし、大田が構築した詩テキストと、河出版の底本であるバイスナー版におけるそれでは、詩句構成が大きく異なっている詩行が多く、それゆえ各詩節が厳密な対応関係にあるわけではない。本稿が「近い」と表現しているのはこのためである。おおまかな対応関係については詩節冒頭部および最後部の語句から判断した。

「追想（Andenken）」（担当：矢羽々崇）は、本書中で提示されている詩のうち唯一、詩人の生前に発表されたものである。全5詩節中、現在までに確認されている手稿は第5詩節分に限られている。こうした事情からこの詩は、これまでのドイツ語諸版の多くにおいて、生前の発表媒体である『1808年詩神年鑑（*Musen Almanach für das Jahr 1808*）』掲載のテキストに基づき、全5詩節中第1詩節から第4詩節までが12行、第5詩節が11行の詩として再構成されてきた。3つの既訳においても、第5詩節は11行の構成が取られている（タイトルについては河出版と青土社版が「追想」、岩波版が「回想」と訳している）。対して矢羽々は、第5詩節が書かれた手稿の読み解きと、内容上の構成から、第5詩節も12行とした。そうすることで、「ヘルダーリンの後期詩における明確な構成意志」を示すことが試みられている（本書141頁）。加えて矢羽々は、第5詩節が書かれた手稿にみられる、いくつかの修正の痕跡を再現している。こうした書き換えの様相は既訳においては伝えられてこなかった。たとえば、第5詩節の冒頭部のうち、いくつかの語句の変更（「友ら（die Freunde）」から「男たち（Männer）」、「インドへと（nach Indien）」から「インド人のもとへ（zu Indiern）」）が本書では示されている。矢羽々によればこれらの書き換えは、移動の主体が持つ英雄性と、その英雄性を帯びた「男たち」と「インド人」の人的な結びつきを表現するためのものである。また、この「男たち」の移動を表す語が、行列もイメージさせる „ziehen“（「向かった」；実際の詩テキスト中では „gezogen“ と過去分詞形で用いられている）から „gehen“（「行った」；詩テキスト中では過去分詞形の „gegangen“）へと変更されたことで、移動の主体が持つ孤独感が鮮明に浮かび上がるとされる（本書149-150頁）。

ここまでに見てきたように、本書においては、訳者による編集を通じて、独自の詩テキストが構築され、また、手稿上にみられる加筆修正の痕跡や、詩テキストとは別の語句も提示されており、それらは既訳との大きな違いをなしている。そしてこうした編集を通じて各担当者が示そうとしているのは、手稿から見て取ることのできる、詩の生成の様相と、場合によってはこれまでに示されてきたものとは異なる詩や詩人の像を示す可能性をも有する、具体的な解釈である。